

「方法」講義立会記 漢字による絵画について

さいおん @saiondayo

今回私が立ち会ったのは、中ザワヒデキの「方法」講義である。中ザワヒデキは、学生時代から美術作家としてデビューし、1996年まではイラストレーターとしての活動を行っていた。「日本初のへたうまCG」のイラストレーションは「バカCG」と評され、数々の賞を受賞。1997年以降は純粋芸術へ転身し、感情・感覚を否定した「方法主義」による「方法絵画」作品群を発表。音楽家の足立智美、詩人の松井茂、音楽家の三輪眞弘と共に「方法主義者」を名乗る。2005年からは「本格絵画」と自ら名付けたジャンルの絵画を発表し続けており、また音楽作品の発表も行っている。

「方法」講義に立ち会い、最も衝撃的であったのが、「字の集まり」を「絵画」と称して発表していたことである。私がこの講義を受講するにあたっての主な要因としては、「方法」という名の付く芸術」を学びたかったというのがある。まるで未知の世界の表現方法を学べるとあって、私は心躍ってこの講義を受けた。絵を描くことを趣味とし、また将来の職種に活用したいと思っている私が、新しいこの「方法」という表現を身に着けるべく受講していたところ、中ザワはある一枚の「絵画」なるものを紹介してきた。(二九字二九行の文字座標型絵画第二番 参照)それは漢字とひらがなが不規則に、だが規則性もあるように並べられている、ただそれだけの作品であった。私は動転した。中ザワの表示した作品は、それはいったいなんなのだとはいいたくなるものだった。これを絵画と呼ぶのか、と。

それから中ザワはこう言った「字には3つある」。まず1つ、これは私の思う通常の文字の役割であるが、意味内容を伝える「字」。例えば詩などがそうである。一般に私たちが行っている文字の利用方法だろう。2つめは「視覚詩」、視覚詩とは、文字そのもののおもしろさを言っている。文字の意味などではなく、文字ひとつとって考えた見た目のおもしろさだ。そして最後に「音響詩」、これは単純に字の出す音のおもしろさを言っている。この3つの「字」についての話を聞いて改めて中ザワの絵画を見てみると、なるほど面白いなと感じることができた。声に出して読んでみると、文字の羅列はなんの意味も持たないので、字の音そのものを楽しむことができる。そしてその作品には、今までに使ったこともなければ見たこともない漢字が含まれていたり、とても新鮮な感覚が味わえた。

しかしどうだろうか、はたしてこれは「絵画」であるのか。作品を制作するツールとして文字を使うことは理解した。しかし「絵画とは一般に、平面的な素地(基底材) supportの上に水、油などの媒材で溶いた顔料、または鉛筆、チョーク、パステル等の固形の画材によって、さまざまな形、色を配合してイメージを作り出していく造形芸術である。」(世界大百科事典 第2版 参照)のだ。だとするとこの作品における「絵画」であるためのイメージはどこにあるのだろうか。私にはそのイメージがつけきれなかった。

ここからは私の意見になる。この文字を使った作品を「絵画」にするためには、文字をつかってなにかしらのイメージを表現すればよいのだ。だとすると文字で絵を描く、または文字で文字を描けば、それは「絵画」に成り得るのではないだろうか。

たとえばの話、中ザワが紹介したもう一つの作品(たしかこれは中ザワの作品とは別であった)に「雨」という漢字の上に、「雨」の点の部分だけがたくさん書かれているものがあつた。この作品はずっと私の中に入ってきた。単純な言い回しになってしまうが「雨」を「雨」で描いているのである。これは私にとって解りやすく、ある意味で単純なもののように思えた、さらに、これがイメージというものなのではないか、と思ったのだ。

中ザワの作品は面白い。私はそう思うが、それと同時に、そこにまた更なるイメージが加わることによって、より「字」によって作られた絵画に魅力が生まれるのではないか、もっと詳しく、深く中ザワの作品を知ることができるのではないか、とさらに期待する。私は「方法」についての知識はある、と断言するには到底力不足だが、今後も中ザワの講義に立ち会うことで、新鮮な芸術の世界を学んでいきたいと思う。